

性別役割分業をめぐる女性の意識構造

— 公民館で学習しているライフサイクル才三期の女性の調査から —

○天野正子(金城学院大学) 荒井俊子(お茶の水女子大学大学院) 内海伸子(お茶の水女子大学大学院)
○神田道子(東洋大学) 木村敬子(淑徳保育専門学校) 倉内史郎(東洋大学)
関口礼子(聖徳学園教育大学) 西村絢子(日本女子体育大学) 暁 由美子(お茶の水女子大学大学院)

I. 研究のねらい

この研究のねらいは、女子教育問題研究会社会教育部会が行った『女性の意識と社会教育に関する調査』に基づいて「性別役割分業」をめぐる「才三期」の女性の意識構造を明らかにすることにある。

(1) 「性別役割分業」とは、男女がその性の違いによって異なる役割を遂行することをさしている。男性は生計の維持=職業役割を、女性は家事・育児=家庭役割を担うことが社会的に期待され、現実にもそれを遂行している。こうした性による特定の役割を固定的にとらえる伝統的な考え方を、性別役割分業観とよぶ。

(2) ここでいう「才三期」とは、女性のライフステージを次の四つに分けたとき、才三番目にくるライフステージをさす。

- 才一期——自分の成長・学習を中心とする時期
- 才二期——社会直捷の世話に手がかかる時期
- 才三期——才二期の役割が減少する時期
- 才四期——老後

これらの指標は、我々が前回行った「女子の大学卒業後の社会的活動に関する調査」の中で定義した用語によるものである。

(3) なぜ才三期の女性を調査対象とするかは、この指標とかがわっている。すなわち才三期は女性の「子育て」からの解放を意味し、ここでは一般に女性の生活圏の拡大がみられ新しい役割遂行の可能性が生まれる。伝統的な性別役割分業観の変化を明らかにするには、意識を支える生活実態が大きく変化する才三期が最も適切といえるだろう。また性別役割分業観と生活実態とのズレが典型的にあらわれるのも、女性が、

もはや家庭役割だけに安住できなくなる「危機」としての才三期であると考えられる。

(4) ここでは次のようなことからについて考察する。②女性の生活のいくつかの領域における性別役割分業意識をとらえ、それらが相互にどのような関連性をもつかを把握する。

②性別役割分業観と、性別格差、望ましい暮らし方、満足感などとの関連を明らかにする。

③性別役割分業における新しい意識であり、女性に最も多い中断再就職意識についてその実態を明らかにする。

II. 調査の対象・方法

この調査はもとも「ライフサイクル才三期の婦人の意識構造と社会教育に関する研究」の一環として行われたものである。このため調査対象は、次の二点で一定の制約をもっている。才一にそれは、公民館または社会教育課主催の学級・講座の参加者に限られている。才二に、対象地域は「社会教育」の地域的特色の関連性をみるという観点から、東京都区内(目黒・品川・練馬・葛飾)、三多摩(小平・三鷹・町田)関西(芦屋・西宮・枚方・大阪)、上田市(中央・川西・上野ヶ丘・塩田・城南)の四地域が選定された。すなわち地方都市の典型としての上田市を含めて、調査対象は都市部に住む、教育委員会主催の各種学級講座の参加者ということになる。

調査票の配布は昭和52年11月。回収は、公民館に委託する方法と直接返送する方法の二つをとった。回収率は次表の通りである。

地域	配布数	回収数	回収率(%)
関西	550	454	82.5
上田	600	396	66.0
三多摩	550	250	45.5
都区内	745	371	49.8
計	2445	1471	60.2

Ⅲ. 性別役割分業観の構造

(Ⅰ) これまでに行われている他の調査では性別役割分業観を、「男は仕事、女は家庭」という考え方をどう思いますか」というような直接的な質問でとらえているものが多い。本調査では生活のいくつかの領域において性別役割分業観がどのような表われ方をするのかを見ようとした。そのための質問及び回答の単純集計結果は次の通りである。(質問の選択肢の文章は簡略又は補足したところもある。「不明」は省略)

<p>a. 女性が職業を持つことについて</p> <p>1. 断然退職型 5.0%</p> <p>2. 出産退職型 5.0</p> <p>3. 職業継続型 19.2</p> <p>4. 中断再就職型 66.7</p> <p>5. 無職型 0.9</p> <p>6. わからない 3.1</p>	<p>b. 女性の政治進出について</p> <p>1. 今のままでよい 11.9%</p> <p>2. もっと関心を持たせたい 71.4</p> <p>3. 男女同数まで進出した方がよい 9.9</p> <p>4. あまり進出しない方がよい 1.6</p> <p>5. わからない 4.3</p>
<p>c. 一般に管理職は男性がよいと思われるかについて</p> <p>1. 管理職は男性で当然 21.9%</p> <p>2. 女性もやった方がよい 64.5</p> <p>3. わからない 12.4</p>	<p>d. PTAや合会への参加は父親と母親は交替でよいかについて</p> <p>1. そう思う 65.6%</p> <p>2. そうは思わない 32.6</p>
<p>e. 男子も、女子と同じくらい家事能力を身につけたらいいかについて</p> <p>1. そう思う 60.4%</p> <p>2. そうは思わない 13.8</p> <p>3. どちらとも思わない 24.4</p>	<p>f. 男性の中で料理や手芸の趣味を他人から学んでいることについて</p> <p>1. いいことだと思う 50.7%</p> <p>2. 差別が好ましくない 7.8</p> <p>3. 別に何とも思わない 40.8</p>

この結果の回答を「分業観」「共業観」及びその中間(「不確定意識」(後述))に分けて整理してみる。

- ① まず全々の項目において分業観より共業観の方が多い。
- ② 分業観が全般に低い中で、比較的的分業観が強く表われている項目は「管理職は男性」及び

「PTA参加は父母交替で」である。前者は確立した職業領域における男性中心の根拠を示していると思われる。後者については、家庭領域の女性中心の根拠とも解釈できようが、同じく家庭に関する項目で「男の子の家事能力」は必要という答が多いことからみて、回答の背景には、現実の可能性や、便宜的・功利的理由など多様な要因が作用しているものと思われる。他方、趣味の領域においては分業観は低くでている。すなわち料理や手芸の趣味を持つ男性について拒否反応はごく弱く、半数が歓迎派で、「何とも思わない」人を加えると9割以上の好意的に反応している。

③ 「女性の職業を持つことについての考え方(職業意識)」と「政治進出について」の質問の選択肢には分業観と共業観との中間にある意識をとらえるものがある。職業意識の「中断再就職型」や、政治進出の「もっと進出すべき」などがそれである。結果ではこの中間的意識の割合が大変高かった。殊に中断再就職型は他の調査と比較しても多いことが注目される。この意識はあらゆる面で分業観と共業観の中間にあり性格が明確でないため「不確定意識」と名づけた。これら不確定意識の性格は単なる妥協や折衷にすぎないのか、あるいはまた全く新しい形での男女共業の創造への可能性を持つものなのか注目される。

(2) 分業観をめぐり意識相互の関連性は全般に強く出ている。すなわち或る項目で分業観をとり意識は他の項目でも分業観をとり傾向が強いということである。次頁の表は職業意識と他の項目との相関表であるが、職業一時型(分業観)は、「管理職は男性で当然」と思い、政治進出も今のままでよい、と分業肯定的である。他方、継続型(共業観)は、政治進出は「男女同数までも」と願い、管理職を女性もやった方がよいと思っている。こうして

一時型と継続型は明確に浮き彫りにされるのだが、中斷再就職型はほとんどの場合兩者の中間に位置し、あるときは継続型に、あるときは一時型に近い意識を示す。そのため中斷型の意識は大変つかみにくい。中斷型についてはVであらためてとり上げる。

(3) 性別役割分業観についての意識と属性との相関には次のような傾向が見られる。

① 年齢については殆どの項目で差がでない。本調査は第三期の女性についての研究であるので分析の対象を30歳～59歳に限ったためと思われる。差のついた項目は「男の子の家事能力」で、30歳から44歳の若い層に共業観、45～59歳は分業観の傾向が見られた。

② 学歴についても一概には言えない。共業観が大学卒と結びつく項目が3つ(6項目中)、短大卒が1つ、小・中卒が1つであった。分業観は小

中卒と結びつく項目が2つあった。

③ 地域については、三多層が共業観と、上田が分業観と関連が深いという傾向が目立っている。

以上のように第三期の女性の意識と性別役割分業観の面からとらえてみると共業意識層と分業意識層がはっきりと分かれ、その中間に多数の不確定意識層が存在することがわかった。これらの意識の性格を更に明らかにするために次に性別役割分業観以外の意識との関連を見ることにする。

【職業意識 × その他の性別役割分業についての意識】

		女性が職業を持つことについての考え方			計 (N)
		職業一時型 (専業主婦・専業主夫)	中斷再就職型	職業継続型	
男の子にも家事能力を身につけたいという意見について	そう思う(男は必要)	39.0	60.8	75.2	60.4 (772)
	そうは思わない	25.8	13.3	9.4	13.8 (176)
	どちらともいえない	33.6	24.6	14.2	24.4 (312)
	不明	1.6	1.3	1.2	1.9 (18)
	計 (N)	100.0 (128)	100.0 (853)	100.0 (246)	100.0 (1278)
PTA参加は父交際でという意見について	そう思う(交際で)	47.7	65.7	77.7	65.6 (839)
	そうは思わない	50.0	32.6	20.7	32.6 (416)
	不明	2.3	1.7	1.6	1.8 (23)
	計 (N)	100.0 (128)	100.0 (853)	100.0 (246)	100.0 (1278)
管理職は男性がよいという意見について	男がよい	49.2	20.3	12.6	21.9 (280)
	女性もよい	34.4	65.3	82.1	64.5 (825)
	わからない	15.6	12.9	5.3	12.4 (158)
	不明	0.8	1.5	0.0	1.2 (15)
計 (N)	100.0 (128)	100.0 (853)	100.0 (246)	100.0 (1278)	
女性の政治進出について	今のままでよい	22.7	12.3	2.8	11.9 (152)
	進出はよい	57.8	73.9	73.6	71.4 (913)
	男女同数に進出	7.8	7.9	19.5	9.9 (126)
	進出しない方がよい	3.1	1.0	2.4	1.6 (21)
	わからない	8.6	3.9	1.2	4.3 (55)
	不明	0.0	1.0	0.5	0.9 (11)
計 (N)	100.0 (128)	100.0 (853)	100.0 (246)	100.0 (1278)	
料理や手芸の趣味を持つ男性について	いいと思う	48.4	49.9	54.9	50.7 (648)
	悪いと思う	12.5	8.2	5.3	7.8 (100)
	別に何とも思わない	38.3	41.0	38.8	40.8 (521)
	不明	1.6	0.9	0.0	0.7 (9)
計 (N)	100.0 (128)	100.0 (853)	100.0 (246)	100.0 (1278)	

IV. 性別役割分業観についての意識と 他の意識との関連

性別学歴格差、賃金格差にたいする意識、地域問題に対する態度、現在のくらし方及び望ましいくらし方、女性の地位、政治、くらしむきに対する満足感、第三期の女性にみられる孤立感、無力感などの生活感情をとり上げ性別分業観との関連を分析した。ここで性別役割分業観を示す項目として取り上げたのは、「男の子の家事能力」、「職業意識」、「女性の政治進出に対する意識」の3つである。結果を要約すると次の通りである。

(1) 学歴格差、賃金格差に対する意識と性別分業観との間には関連がみられる。分業意識層は性別格差を肯定し、共業意識層は格差を否定する傾向があった。

(2) 賃金格差に対して「やむをえない」とする意識は、共業観よりも分業観に多くみられ、65.6%から69.8%に及んでいる。不確定意識もまた、やむをえない意識との関連が強い。

(3) 地域問題としてのゴミ処理場建設計画に対する態度では、権利を要求し積極的にとりかゝるのは共業観層に多く、追従的態度は分業観層に多くみられた。不確定意識層は中間的傾向を示している。

(4) 女性の地位に対する満足感と性別分業観との間には関連がみられ、分業観は「満足」「どちらともいえない」の率が高く、共業観は不満を感じている率が高かった。

(5) くらしむきに対する満足感にも(4)と同様の傾向がみられた。また政治に対しても全般的に不満が多いが、傾向としては同様である。

(6) 望ましい暮らし方では「与えられた範囲で自分の好きなことをしてのんびりにくらす」という現状享楽志向は分業意識にやや多く、「自分なりの生き方をいとおきさせたりたいことを追求する」という自分中心志向は

共業意識と結びついている。この傾向は3つの性別分業観の項目に共通している。

(7) 更に、今のくらし方と望ましいくらし方のずれをみる。共業意識層、分業意識層ともに、望ましいくらし方におけるよりも今のくらし方において多く選択されているのは、享楽志向、家庭重視志向、子ども志向、現状肯定志向の生き方である。逆に、社会活動志向、自分中心志向の生き方は望ましいくらし方において多く選択されている。共業意識層は享楽志向におけるずれが大きい。家庭重視志向は享楽志向ほど大きなずれはみられないが、とくに職業意識の継続型(共業観)にずれが大きい。「政治進出」と「職業意識」での不確定意識層は自分志向の生き方においてずれが大きい。

(8) 孤立感・無力感を持っているのは分業意識よりも共業意識層に多い傾向が見られた。

以上の結果から性別役割分業観に対する意識とこれらの意識との関連を総合的にとらえてみる。まず「分業観」は、性別格差を、当然、あるいは否定しながらもやむをえないとして肯定し、地域問題に対しては追従的態度をとっている。そして現状で楽しくという享楽志向の生き方が多く、将来についても享楽志向、家庭重視志向が高い。しかし将来の生き方について展望をもっている率は低い。また孤立感や無力感などはあまり感じておらず、女性の地位や暮らし、政治などに対しては満足している。

「共業観」は性別格差を否定し、地域問題に対しては積極的態度と関連している。望ましいくらし方として自分中心志向が強く、将来の生き方について展望をもっているが、くらしむき、政治、女性の地位についての不満感が強く、孤立感、無力感と結びついている。

「不確定意識」は、多くの面で分業観と

共業観との中間的傾向を示し、性別分業について意識と同様である。望ましい生き方では家庭重視志向と自分中心志向に大きく分かれる傾向が見られ、これはこの意識の特徴を探る手がかりとなりそうである。

V. 中断再就職型について

職業観については、女性では中断再就職型を支持する者が多いが、本調査でも、これを支持する者が66.7%を占めている。ここではその実態を属性、家庭や職業の実態、社会教育とのかわり等の面からみてゆきたい。

(1) 年令・学歴・収入・夫の職業・家族構成・所属団体等の基本的な属性による特徴はみられなかった。中断型とは、これらの属性に関係なく広く支持されているとみられる。

(2) 家庭内の実態をみると、まだ家計を全部管理している者の割合は継続型に比べて低い。夫の家事への協力の実態及び協力要請は、継続型と一時型の中間に位置している。外出する際に先をつかう相手として夫をあげる者の率は中断再就職型が最も低い。ところが子どもに気をつかう者についてみるとこれとは逆に中断型が最も高く、一時型、継続型との間に差がみられる。中断再就職型では子どもが何よりも重要な存在として意識されているところに特徴があるようである。

(3) 職業についてみると、仕事を持っている者の割合は一時型と継続型の中間の教値を示している。しかし現在の仕事の継続年数は、一時型、継続型に比べて短い傾向にある。また、現在は職業を持っていないが職業につきたいと考えている者は継続型と同様に80%以上に及び、一時型とは40%の開きがある。

さらに仕事につきたい者のうちで仕事をさかすつもりはないとする者の割合は継続型とともに、一時型より低い。しかし仕事を持たない理由では、一時型と継続型の間の中間的教値をとる。またつきたい仕事の内容では一時型に近い傾向がみられた。過去の常勤の経験と退職のきっかけについては若い特徴はみられなかったが、注目してよいと思われるのは、その常勤の仕事の継続予定を「子どもができるまで」とした者の割合が、一時型・継続型に比べて高いことである。次に、資格については中断再就職型は継続型とともに、資格をとりた方がよいと思う者の割合は90%以上で、一時型との間に開きがみられる。このように中断再就職型は就業希望などでは継続型に近い傾向を示すが子どもを重視する意識が強く、職業意識に影響している。

(4) 社会教育とのかわりで見ると、参加経験、参加理由、参加してよかったと思うこと等では殆ど特徴が見られない。「これからの学習」についてみると中断再就職型の傾向は全体として一時型とはほぼ一致している。「政治・経済・社会などの知識」及び「婦人問題」ではその割合が継続型より低く、「趣味・スポーツ」では高くなっている。(しかし「歴史・文学」については、継続型に極めて近い教値となり、一時型との間に差ができていく。一方これらの学習についての希望ではあまり大きな特徴はみられない。学級・講座についての改善への要求では、「保育室」を求める者の割合が一時型とともに低く、「終了後の発展を考えるとほしいとする者の割合は継続型とともに高くなっている。このように中断再就職型は多くの面で一時型と変わらないのであるが、「歴史・文学」の学習経験及び志向においては継続型に近いところに特徴がみられる。